

## 平成30年度広島市立舟入高等学校入学式式辞全文

本日ここに平成30年度広島市立舟入高等学校入学式を挙行するにあたり、多くのご来賓の皆様のご臨席を賜り、心から厚く御礼申し上げます。

さきほど、362名の入学を許可いたしました。新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。きょう皆さんに出会えた幸運に感謝いたします。

十七、八歳の時期について、能を完成させたといわれる世阿弥は「風姿花伝」の中で、重大で危険な時期だと言っています。ちょうど今の高校生にあたります。世阿弥によると、この時期には声や体型が変わり、様々なことが以前のようにはできなくなる、本人はがっかりして、くさりきる。ここを乗り切るには、どんなに笑われても、恥ずかしいと思っても、心を決めて、朝に夕に声を出す稽古を繰り返す以外に方法はない。ここで諦めたら上達は止まる。こう記されています。能に限らず、皆さんはこうした困難な時期にさしかかっています。

そこで、皆さんに、二つのことをお話します。

一つ目は、学習について。疑い、迷い、考えてこそ身につくものが、舟入高校で学ぶものです。華やかでわかりやすい大きな声に踊らされてはなりません。学ぶべきものは、むしろ、はるか遠くから届くかすかな声に隠されています。その声を聞き分けるために、自分が知りえなかったこと、自分が理解できないことに対してすら心を開いておいてください。高校では、これまで通用してきたものが、通用しなくなる。誰かが代わりにやってくれていたことを、誰もやってくれなくなる。自分に貼り付けられていたレッテルが剥がれていく。「若さ」を「幼さ」と履き違えてはなりません。学習するとは新しい価値に気づき、自分の殻を突破することです。この世界は驚きにあふれています。誰かが準備した解答を鵜呑みにせず、それを問いに変えてください。自分が当たり前と思っていたことに疑いをもち、問いかけ、それに答えようと辛抱強く考え続けてください。

二つ目は言葉について。以前「イラク戦争」に軍隊を派遣しないフランスに対してイギリスのマスメディアが「腰抜け」と非難したことがあります。様々な事情があったといわれていますが、これに応じたフランス大統領府は次のようにコメントしました。

「侮辱の言葉は、投げつけられた人より、発したものについて、より多くを物語る」

君が用いる言葉は君自身を表します。時として君の言葉が人の胸を貫く弾丸に成り下がる。しかし一方で、言葉は人を勇気づけるし、自分の心すら豊かにする。君の言葉を、対話の道具として、考える道具として使ってください。「わたしたち」という複数形は、単なる「私」の寄せ集めではありません。好みや感じ方、考え方が異なる人が集い、ともに対話し活動するとき、人間同士の相互作用が力を生む。この力によって「私」の集まりは「わたしたち」となる。その原動力は言葉と行動です。「おのれに徹して人のために生きよう」という校訓は、「わたしたち」がバラバラになってしまわないための心構えです。

結びになります。保護者の皆様。本日は、おめでとうございます。冒頭で、新入生は困難な時期にさしかかっていると申し上げました。彼らが試行錯誤する姿は成長の証です。むしろ喜びましょう。私たちは、生徒が境界線を乗り越えていく力を身につけさせたい。そう願って指導してまいります。だからこそ、生徒が望むことでも、させないことがあります。気が進まないことでも、敢えてさせることもあります。本校の生徒は、仲間とともに切磋琢磨し、支え合い、この高いハードルを乗り越えようとしています。たとえ失敗してもチャレンジするでしょう。この繰り返しは知的な大人になるためには避けて通れないものと考えます。全力でその支援をいたす所存です。保護者の皆様には、本校の教育にご理解をいただき、ご支援を賜りますことをお願い申し上げて、式辞といたします。

平成30年4月7日  
広島市立舟入高等学校  
校長 日浦 毅